

徳川みらい学会第4回講演会

「今川文化と能と家康」

横浜国立大学教授 三宅晶子さん



徳川みらい学会第4回講演会「今川文化と能と家康」を2016年10月21日、静岡市葵区のみぎのこホールニューシアで開催しました。講師は、三宅晶子横浜国立大学教授。会員約200名が参加し、NHK制作「山川静夫の華麗なる招待席 観世流人と歴史」と、三保松原が舞台の能楽作品「羽衣」を紹介する映像も鑑賞しました。

三宅晶子さんの講演要旨は次の通り。

観阿弥は1384年に駿府で亡くなった

能で静岡との関係が出てくる一番古いものが『風姿花伝』第一年来稽古条々の五十有余という項目になります。「亡父にて候し物は、五十二と申し五月十九日に死去せしが、その月の四日の日、駿河の国浅間の御前にて法楽仕。その日の申楽ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり」。観阿弥は、静岡浅間神社に神様に捧げる舞を舞うためにやってきて、駿府で亡くなったことがわかります。

『常楽記』の至徳元年(1384)5月19日の項に「大和申楽の観世大夫、駿河において死去」とあり、観阿弥は、鎌倉幕府が滅びた元弘3年に生まれましたことがわかりました。鎌倉時代は田楽が盛んに行われていました。能は室町時代、足利幕府とともに成長していった芸能です。それが家康を経て、徳川幕府にも保護されて、明治を迎えるわけです。

今川家では芸能が盛んに行われていた

1526年に今川七代氏親が制定した『今川仮名目録』には、今川館の家臣の席次について「神仏勧進の申楽、田楽、曲舞などの見物の棧敷の席次は籤引きで定めて沙汰すべきである」と書いてあります。今川の領内で芸能が盛んに行われていて、くじで決めなければいけないほど、席取合戦をしていたことがわかります。公家の山科言継は、1557年に今川義元の駿府を訪れた時の日記「言継卿記」に「浅間神社の廿日会祭で観世大夫と同席」等の記述を残しています。

駿河十郎大夫が『花伝書』を家康に献上

江戸時代初期の『四座役者目録』には、「東照大権現様(家康)の傍に仕えて御伽衆の役割をしていたのが駿河十郎大夫で、『花伝書』を権現様に献上した」と書かれています。十郎大夫は、世阿弥の息子の元雅の家柄です。天正6年に観世家七世宗節が書き写した『花伝第七別紙口伝』には「この本は十郎大夫が家康に献上した本を書き写したものだ。この2冊のほかにはない秘伝で、遠江で写した」という奥書があります。世阿弥の他の書も十郎大夫が家康に献上しており、この頃から、家康と観世家は密接に関わっていました。

家康は岡崎城、浜松城で謡初めを開催した

家康は、浜松城で天正元年1月2日に恒例の謡初めを開催しています。岡崎城でも謡初めを開催しています。室町幕府では観世三世元重の時から謡初めを開催しています。今川家は室町幕府と関係が深い家柄ですから、駿府でも謡初めは開催していた

と思います。家康はそれを見ていて、採り入れたと思います。

大御所家康は駿府に能役者を集めた

慶長13年以降、家康は駿府城で能を頻繁に行っており、浅間神社の能も見物しています。後に和歌山城主となった頼宣は、7歳で6番も能を演じています。

慶長14年、家康は大坂城の能役者に駿府に詰めるように命じています。信長が最原にした梅若大夫、秀吉が最原にした下間少進、金春安照を駿府に呼んでいます。

観世九世身愛が逐電したことを家康が怒り、高野山に蟄居を命じたからです。

慶長17年に身愛は許されますが、舞えなくなっていました。

慶長19年8月26日、観世十世となる重成が舞います。家康の観世家への最原が再び始まります。

家康は、観世家を最原にしました。観世家がダメな時は、他の能役者を支援しました。かなりの鑑識眼を持つていたことがわかります。『当代記』には、素人の能を笑い、能の下手さを怒り、文句を言う家康が生き生きと描かれています。

家康が亡くなると、能役者は江戸詰めを命じられ、その後の駿府での演能記録は残っていません。(文責：静岡商工会議所企画広報室)

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)